

昭和の南海地震体験談

氏名: 日下 善右衛門(くさか ぜんえもん)
生年月日: 大正 15 年 5 月 14 日
地震を体験した場所: 印南町
当時の家族状況: 祖父、祖母、父、母、姉、妹、弟



1) 地震発生時の状況

当時 21 歳、今の家より浜寄りの家に、家族 8 人で寝ていた、きしんだ戸を無理やり開けて、8 人で家の前の空き地に避難し、揺れが収まった後、全員着替えに家に入り、靴を履き、米を蔵に出しに行き、蔵から戻ると、家の前に水が来ていた。

2) 津波襲来時の状況

この土地では、昔から「地震が来たら要害山！」と伝承されていたのだが、いつの間にか「津波が来たら要害山！」となっていた。

米を出しに行き戻った時、浜から漁師達が「津波や!津波!」と言う大声が聞こえて、家の前が急流になっていた。弟、妹、祖母の順に、一足早く、裏口から避難、私は祖父、病氣療養中の父を抱え、母、姉と手を取り合って表から出たが、細い道から少し広い道へ出ると、腰まで濡れたので、潮の勢いも強くて、とても歩けず、少し戻った知人の家に行き、2 階で休ませて貰った。

3) 家族の行動・被害

表から出た私たち 5 人は、知人の家で 5~6 分休ませてもらっている間に、潮の勢いが少しましになったので、家に戻った。

裏から先に出た「3 人の様子を見てくる」と言っ、私は 3 人の着替えなどを持ち、要害山に行こうとするが、流出物や、瓦礫で乗り越えるのに転んだりして、仕方なく着替えに戻り、再び山を目指してゆくと、焚き火している所に、弟と祖母を発見。二人の様子を聞くと、「あまりの急流で、自分のことで精一杯だった」と聞いて、不安な気持ちを抱きながら、再び戻って妹を捜す。山に登る道が幾通りかあったのですべて登ってみるが居ない。山、町の中を探して回った。

夜が開けて、朝の 8 時頃、母と一緒に妹の捜索をしていて、流出した家や木の下敷きになった妹を発見する。触るとまだ、暖かくて、(これ、何とかならんのか)と、思った。

「人が死んだら、背負ったり、抱えたりしてはいけない」と言う、言い伝えで、近所の人と、妹を戸板に乗せて、家に連れて帰る。家は床上浸水だが、幸い畳が濡れていなかったの、妹をき



れいにして 12 月 23 日ごろ葬式したと思う。火葬でお寺さんに埋葬。

4) 集落・周囲の被害

印南では 17 人が亡くなった。大体が床上浸水。川の近くの家は、流出。

自宅の屋根瓦が、地震でずれていたのを、妹の弔いに来てくれた親類が直してくれた。

家に戻った時、「畳が濡れなかったこと」と、「味噌糞一緒」と言う言葉通りだった」のを、覚えている。

5) 地震・津波後の生活

近所や親類が、妹の弔いに来てくれて、色々手伝ってくれた。

1 月になって、恩師が、私が妹を亡くした事を知り、尋ねてくれて、話したことも忘れられない。父は正月明けから又、仕事に復帰した。私は、1 月末に学校に戻った。

6) 次の災害への備え

戻ってから、県事務所に行き、地域の海拔や、潮の流れ、津波の流れ方、湾の海底の様子なども勉強した。

今の住所に、昭和 34 年に、鉄骨製の家を新築した。印南中学校の子供達に、体験談を話した事もある。

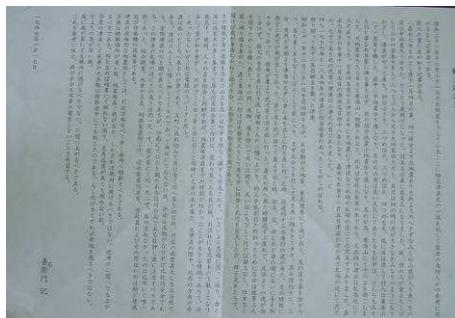
昭和 22 年 1 月 17 日に書いた、死んだ妹に宛てた手紙があり、それは「津波郷土史」となって伝承している。

7) その他

地震津波の前日に、夕方遅くまで浜で、家業の炭の荷積みしていて、「もう、遅いので仕事これぐらいにしといたら？」と言いに来てくれた妹の姿、其れが最後の思い出だった。

昭和 23 年 3 月に学校を卒業して「代用教員」と思ったが、祖父に家業を継ぐように言われて、今に至る。

我が家の勘違い「地震来たら、要害山」を「津波が来たら」となっていて、結局、妹が死んでしまった。揺れてすぐ逃げられない場合は、近くの高い所、家の二階・三階でもいいから、高いところに登ることを伝えたい。



妹に宛てた、「津波郷土史」